

幼児の言語指導

(三才児)

入園初期の言語指導

村 田 修 子

幼稚園において個人差ということは、どの経験内容でもかならず問題になるもので、「個人をみつめてそれに対して適切な指導をする」ということは幼児指導の一つの原理とってさしつなかないと思われま

す。そこで三才の人たちを受持つにあたって考えたことは、三才児は何といっても生活指導が一番大切で、基本になる指導内容となることはいうまでもないので、それを考えるのはもちろんのこととして、その他に三才という個人差の多い時期にあたって、何に重みをもたせてその効果をいっそうあげるようにしていこうか、ということでは

た。

年齢の少ないものほど未分化なわけなので、重点をおくといっても、子どもにそれがわかるように濃厚にするというわけではなく、先生の心がまえとして重みを持たせた、という程度のものであるのはもちろんのことです。

その中心となるものとして、人間が生まれていらい誰でもが本能的に好むリズム遊びをとりあげることを考えたが、今までの経験からみると、大部分の子どもたちは毎日でもリズム遊びをしたくてたまらないというようすで、子どもの側にうけいれの体勢がある程度出来ているので、持っていきか

たしだいでは特別に骨を折らなくても他のものよりも比較的效果をあげやすいため、それよりも日常生活と密接な関係にある「言語指導」に重点をおくことを考えました。それは、入園してきた子どもの中には、環境が変わったことよって抵抗が感じられる人も多いため、言語生活を中心にしてその指導にリズム遊びをからませたらばより効果をあげられるのではないか、と思ったからです。

先づ組を構成している十六人について、ふだん親と話し合いをしたことや、われわれが日常観察したことによると、五月初め頃は次のように分けられました。

- ・先生に対しても友達どうしでも家と同じように話し合いがされていると思われるもの(女五人・男二人)
- ・先生にも友達どうしでも話し合いをするということが、ほとんどといってよいくらいないもの(女二人・男一人)

・先生には話しかけたり答えたりするもの
(男五人)

・先生には話しかけないが、友達どうしては話し合うもの(女一人)

そこで、小さい集団とはいえこういう世界に入った以上、よりよい社会性を身につけるため

・環境のちがった中にきたことによる緊張感を一日も早くほぐす。

・友達どうして遊ぶことのたのしさが分る。

・三才児なりの系統だった指導が出来る体勢をなるべく早く作るようにする。

これらを一学期の大きい目標として出発しました。

何でもそうですけれども、はじめの一日、はじめの一回 というように、始めということがあとあとまでたいへんな影響をもってくるものです。たとえばちょっとした都合でしたことが子どもの頭の中に入りこんでしまって、もっとよいやり方に変えようと思っても改められずにだせいに流れてしまうということはよくあることです。

そこでお話をきく、という場合でも子ども

たちが受身の立場ばかりにならないように、子どもたちにも自分の知っていることを気軽に話させるようにしました。けれども小さい人達が自分から進んで話をするのは、直接経験したことのあるものや、たいへん印象深かったことなど自分の体験によることが多いわけです。それで家庭より提出してもらった今までの経験などを書いて中から、どういうお話を知っているか、好んで聞くか、知っているうた、などをひろいあげてみました。

お話は、最近絵・色彩の好ましいよい本が出ていることによると思われますが、桃太郎・浦島太郎・かちかち山・白雪姫・七匹の子やぎ・ピーター兔・三匹の子豚・ジャックと豆の木・赤づきん・シンデレラ・イソップ・その他などでだいたいみんなに共通したものです。

うたも・靴がなる・はとぼっぼ・どんぐり・夕焼小焼・おうまのおやこなどで、お母さんの知っている昔からの名曲が多く、ラジオのうたの小母さんでうたわれているものの中でやさしくしかもかわいらしい内容のものも多くみられました。

そこでお話・紙芝居・幻燈をするのに耳新しいものよりも今までにみんなが知っているものに重点をおいて、先生の話と、断片的ではあるがみんなの話し出すのをまぜてすすめてみました。こうすると年令によつては先走つてどんどんその筋道や結果だけを言い出す子どもがあつて、他の子どもは注意が半分そちらにとられて効果が減ずることがあるものです。けれども、三才という年令では言うことがほんの一部分にしかならないので、そのためにわずらわされるということはありませんでした。こうしたことによつて感じたことをあげると、耳新しい話をきくときは表情が固くちよつとでもこみいったところがあつたりするとすぐ「何だろう」というような不審の表情がみられたり、すぐ他のことに気持が移つてしまふのです。けれども、同じように聞いていても知っている話のときのようにすはゆつたりとして楽しんでその中にひたりきつている、ということががわかれたので、このことからしても幼稚園になれない人のはじめの指導としては気分をほぐすのに効果があつたと思われまふ。

これと平行して動物とか、日常みなれた道具とか、子どもに身近なものの絵をみてそれによって話を発展させるようにしました。たとえばかわいい猫の絵をみて

B「うちにチロというのがいるわよ」

「そう、どんな色なの」

B「しろ」

「Aちゃんちのうちにはなにがいるの？」

A「にわとり」……

というようにみんなの中にながら気軽に一人で発言して思っていることを言う。という経験を多くして自信をもたせるように試みました。こうするうちに先生にきかれれば小さい声ながら話をしないと人はいなくなりました。話のよく出来る人はさらに「Cのうちにもたまちゃんという白いねこがいたのよ。だけどまいごになっていなくなっちゃったの。だからいまはエスという犬にしちゃったの」というような文章として形のととのった話をみんなの前でするようになり、また「先生、やぎってなぜ白いか知っている?」「知らないわ」「おしえてあげましょうか、だって白い紙たべるか

らよ」などと子どもらしい想像の世界の話しあいや、何のわけもなく「お魚は何か?」「ひこうきは何か?」と友達どうしでききあうような場面もみられました。

またすわって話し合いばかりするのでなく、絵をみたあとそのものの模倣をして遊んだことは気持をほぐすのにいっそう効果があつたように思います。

もう一つ気分をほぐすのに役立つとは思はれることは、先生が「今日はねぼうをした」とか「氷のところですべてしまった」とか失敗した体験を子どもと同じように話すと、自分よりいちだん高いところの人と思っていた先生にたいする気持がほどけて、自分と同じ位置にある先生を見出すことによって安心感・近親感を持つようになり、めだつて話しかけてくるのが多くなりました。

六月の実際指導研究会のとき、おおせいの人の真中でいつもと同じように、全部の子どもが何か一言ずつでも話しをしたことや、音楽に合わせて面白そうにはねまわったことなど、その効果がいくぶんあつたと思われることです。またあのような変わった

環境の中でとかく違う方へ興味をひかれそうになったとき「つぎは何でしょう。モーターとなくものよ」というように持っていくと、はっきり分るように皆の気持がぎつとこちらの方にくるので気持の散るのを防ぐことができました。

そのあとの波多野完治氏の構演にもあつたように、「幼児の言葉は観念的なものから入るよりも、感覚的なものの方が幼児の生活にマッチしたもので、こういうところから入るのが本当のいき方である」とおっしゃったことは、このことを裏づけていたのだいようであつた。

こうして扱った場合のよかつたところばかりあげてきましたが、かならずしもよいことばかりではありませんでした。

三才という自分中心の年齢であるのでしかたがないにしても、お友達の話をきくことがむずかしいということがありました。これはある程度しかたがないと肯定しながらも、いちおう一人ずつお話しした方がよく分ることを実際の機会をとらえて分るようには話しました。これがたびかさなる間にいくぶんそれをきくという気持が出来たよう

です。またもう一つ、話のよく出来る人ばかりがやってしまう、ということもあります。

これらは先生の指導に加えて、子ども自身のものからの経験と年令で解決していける。

(四才児)

劇あそびへの一過程

幼稚園における言語指導

幼児期における言語発達は著しいものがある。が、それは自己中心的であり、相手を意識することが少ないのが、幼稚園という一つの集団の中で、だんだんに社会的な働きを持つようになるとしむけることが、この時期の言語指導の一つの大きな要素となっているのではないかと考えた。

四才児、それも六月に研究会を持つのであるから、ごくはじめの時期である。幼稚園の生活では、小学校のように学科学位に学習するという性質のものではない。

ることとは思いますが、現在の年令では、自分から話をするということ、聞くことと目方にかけて場合、前者の方に重みがあると思えますので、後者の方はこれからの課題としておきます。

関 治 子

いのであるから、言語指導といっても、その場はきわめて広大であると思う。個人差も大きい、自由の会話や遊びの中で、個人の指導も教師の意図で、よい指導の場を構成することができる。また、お話をきいたり、紙芝居その他聴視覚に訴えるものを通じて言語に関する興味と知識を得て、発達を促していく場合がある。

ところが、この集団生活をしている幼児たちは、家庭から離れて、はじめて幼稚園という社会集団に属したわけで、今後は小学校、中学校などの学校という社

会集団に、あるいはクラブにしろ近隣社会にしろ、長い人生の間には数え切れないほどの社会集団に接するのである。

そこではじめての社会集団生活である今の生活においても、おおいに言語が社会的な働きを持っているということ念頭において、そういう指導の基礎を築いていきたいと考えた。

劇あそびについて

私の現在うけている組は、三才児のときすでに一年間幼稚園生活を経験している。その中で、リズム劇あそびを経験した。

劇あそびの中にも、いろいろの形があるが、幼児期においては、身体を動かす劇あそびにはリズム的要素は、ひじょうに重要な位置を占めている。

劇あそびはもちろん、芸術や文学の価値の多少を問題にするものでなく「一つの遊び」としてなされ、また扱っている。

いろいろ目標もあろうが、つぎのような指導面が含まれている。

・ 共同で一つの遊びをするための、社会